

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月21日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730415

研究課題名（和文） トクヴィル社会理論の再構築—19世紀前半の英仏における「二重の貧困」の研究

研究課題名（英文） Restructuring Tocqueville's Social Theory: A Study of New Kind of Poverty in 19th-Century France and England

研究代表者

高山 裕二（TAKAYAMA YUJI）

早稲田大学・政治経済学術院・助教

研究者番号：90453969

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀フランスの思想家アレクシ・ド・トクヴィルの社会理論を再構築することを目指した。19世紀ヨーロッパ、特にイギリスやフランスの産業化は、物質的貧困（いわゆる「ポーペリズム」）とともに、新しい種類の貧困をもたらした。トクヴィルは時にこれを「精神的貧困」と呼び、自由への脅威とみなした。本研究では、トクヴィルが、主にこの新しい種類の貧困をめぐって社会理論を構築したこと、そしてそれは同時代のフランスのロマン主義作家、例えばヴィクトル・ユゴーやオノレ・ド・バルザックの社会分析と多くの共通点を持つものであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to restructure Tocqueville's social theory in the historical context of nineteenth century France and England. The industrialization of 19th century Europe, especially in England and France, had brought about new kind of poverty as well as so-called pauperism. Tocqueville called it 'misère intellectuelle' and considered it the threat to individual liberty. In the process of this two-year research, it has become clear that Tocqueville had structured his social theory mainly about new kind of poverty and it had have much in common with social analysis by romantic writers such as Hugo and Balzac.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：トクヴィル、貧困問題、ロマン主義、19世紀、精神病、個人主義

1. 研究開始当初の背景

トクヴィルは様々な分野で研究されてきたが、なかでも社会学における研究蓄積は比較的厚い。とはいえトクヴィルは、サン・シモンやコント、デュルケムやウェーバーとと

もに社会学の創始者の一人に数えられるわりには、その思想研究が体系的になされてきたとは言い難い。その理由は、国内外のトクヴィル研究が戦後の政治状況に左右されて

きたためである。冷戦下においては、アメリカの自由主義の擁護や大衆社会批判という文脈で研究がなされ、冷戦崩壊後は東欧の市民社会の民主化や新しい共和主義の理論化という文脈で研究が進められてきた。もう一つの理由は、今日、大衆（群衆）心理を批判するような政治理論よりは、社会に存在する不平等や貧困のような問題に対処する社会理論に学問的関心が移行したため、社会学の分野でトクヴィルを研究する意味は少ないと考えられるようになったためである。しかしトクヴィルの思想は、19世紀前半の産業化とともに不安定化した社会の諸問題をめぐって形成されたことを見落としてはならない。特に主著『アメリカのデモクラシー』第1巻刊行（1835年）後、二回目のイギリス旅行を経て、トクヴィルのなかで産業化が不可避的にもなう「**貧困問題(paupérisme)**」への関心が高まり、それは中心的な関心となる。

従来、トクヴィルの社会問題に関する研究は十分になされてこなかったが、近年トクヴィルの社会問題に改めて光が当てられつつあるとあってよい。しかし近年の代表的な成果である例えばケスラー（2000年）の研究も、今では一般に公開されるようになった「**トクヴィル古文書(Tocqueville Archives)**」の分析はなされていない。しかもトクヴィルにおける「**経済的貧困**」の考察に注目した意義は大きいが、同じくトクヴィルの思想のなかで重要な位置を占める「**個人主義**」と「**精神的貧困(misères intellectuelles)**」とをあわせて考察されなければ彼の社会理論を一体的に理解することはできない。

なお、トクヴィル研究者以外でも、近年、例えばアメリカでは憲法学者のR・スミスや、フランスでは政治学者のロザンヴァロンなどもトクヴィルの貧困論に注目しているも

の、その分析はきわめて部分的なもので、その全体像を描いた研究が待ち望まれている。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀フランスの思想家であるトクヴィルの社会理論を再構築することを目指す。戦後、時代ごとに注目された政治理論と結びつけて論じられてきたトクヴィルであるが、彼の関心の中心には、19世紀前半のフランスやイギリスの「**貧困問題**」があった。19世紀に誕生した貧困と言えば、一般的には産業化がもたらした「**経済的貧困**」を指すが、トクヴィルはこれと同時に「**精神的貧困**」の脅威を指摘した。本研究では、トクヴィルに独自の「**二重の貧困**」の認識と、これに対して彼が構想した社会政策、「**市民福祉**」の構想を未刊の草稿や資料などを用いて考察する。そして、現代社会においても二重の側面をもつ貧困問題に対処するような社会理論の形成に貢献する。

3. 研究の方法

(1) ①トクヴィルの精神的貧困に関するテキスト分析、②イギリス救貧法行政に関する歴史研究とトクヴィルの貧困論考の分析をおこなう。①には、主著『アメリカのデモクラシー』のテキストの豊富な草稿の検討に加えて、その執筆期間に親類へ送られた書簡の考察をおこなう。②には、イギリス救貧法に関する歴史研究を整理したうえで、トクヴィルの救貧法批判を、未刊の論考やシーニアとの書簡の分析を通して明らかにする。

(2) ①(1)で明らかにしたトクヴィルの二つの貧困論を、同時代の著作家の指摘と比較しながら実証的に分析する。②『アメリカのデモクラシー』第2巻公刊（1840年）後に、トクヴィルが構想した社会政策を明らかにする。①の分析には、バルザックなど同

時代の社会を詳細に描写した作家のテキストと比較することはきわめて有益である。②の分析には、政治家トクヴィルの演説やその草稿の分析が有効である。

4. 研究成果

本研究は、トクヴィルに独自の《二重の貧困》、特に「精神的貧困」の認識に焦点を当て、彼の社会理論を再構築した。(1) ①トクヴィルの「精神的貧困」の認識の特徴を明らかにするため、同時代に誕生した精神医学思想における精神病の社会分析を整理した(これは[学会発表]2で報告され、[雑誌論文]1で発表された)。また、フランス国立古文書館に出張し、この点に関わるトクヴィルの未刊のテキストの渉猟をおこなった。②イギリス救貧法に関する歴史研究を整理したうえで、トクヴィルの救貧法批判を、未刊の論考やシーニアとの書簡の分析を通して明らかにした(これについては所定の研究期間に発表することができなかったが、現在発表を準備している)。(2) ①この時代のヨーロッパ、特にフランスの近代化/産業化に対抗して隆盛した精神運動としての「ロマン主義」の思想家の社会分析と、トクヴィルのそれを比較した。具体的には、彼の同世代であるユゴーやバルザック、ラマルチーヌといった代表的なロマン主義作家の「精神的貧困」の描写を、文学史研究の成果を交えて整理する一方で、トクヴィルの草稿類(主に書簡)を丹念に分析することで、両者の社会分析としての類似性を明らかにした。②トクヴィルの社会政策を、散在したテキストを再構成することで分析した((2)の①②は[図書]1・2として整理され発表された)。

最後に、以上を踏まえて、本研究の国内外における位置づけとインパクト、そして今後の課題について記述する。(1)トクヴィル研究としての意義。トクヴィルの思想、特に

デモクラシー論は政治/社会思想として今日改めて注目を浴びているが、それを体系的に理解するには、トクヴィルの主要な関心であった(晩年になるに従って関心が膨らんでいった)新しい種類の貧困の検討が不可欠である。本研究は、この点で国内のトクヴィル研究の欠点を補うものである。また、海外でも研究が進みつつあるこの貧困問題について、従来の見方(主に社会主義研究の影響のもと物質的貧困に関心が傾斜しがちな海外の主な研究)とは異なる多様な視点を提供するものである。その際、諸外国でもまだ十分に注目されていないテキストの分析をおこなったことは資料的価値があり、トクヴィル研究の世界的な発展にも貢献するものであると考えられる。(2)社会学・社会学史における意義。社会学の創始者の一人に数えられるトクヴィルの社会理論は、国内外で十分に研究されてきたとは言えない。これに対して本研究は、社会問題の精神的次元に初めて着目しそれを社会的に分析したと言われるデュルケムに先駆けて、「アノミー」に類する社会病理を深く考察したトクヴィルの社会理論を解明することで、社会学史の新たな系譜を発掘し、その理解の幅を広げることができた(単なる両者のテキスト分析に基づく類似点の指摘ではなく、トクヴィル社会理論の思想的文脈を踏まえた再構成を試みることで、トクヴィルの時代拘束性とともにある面ではより深い認識を明らかにした)。また今日の市場化は、経済指標では測りきれない「質」の格差を拡大させており、これへの対応が社会学の大きな課題である以上、貧困問題の経済的次元と精神的次元に注目するトクヴィルの社会理論は、社会学の現代的な再構成にも寄与するものである。

今後の課題としては、本研究では解明した上でその成果を公表することができなかつ

た19世紀イギリスの貧困問題とフランスのそれとの社会理論の「比較」の視点、およびその意義について整理し、(既述のように)論文等で公表することが一つの課題である。また、本研究では、トクヴィルの新しい種類の貧困問題の認識を同時代的に認識することに重きを置くことで、それに対するトクヴィルの社会理論、「市民福祉」の構想の萌芽を宿した分析を十分に展開することができなかつた。この点を含めた研究を国内外で発表することが残されたもう一つの課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- 1、高山裕二、社会問題としての精神病の誕生——19世紀フランスにおける社会的資本の縮小と憂鬱の拡大、早稲田政治経済学雑誌、査読無、380号、2011年3月、21～36頁。
- 2、高山裕二、豊かさのなかの不安——トクヴィルの個人主義批判と「利益」の再発見、思想、査読無、1033号、2010年5月、94～111頁。

[学会発表] (計2件)

- 1、高山裕二、トクヴィルとフランス革命——〈公共精神〉の行方、政治思想学会、2011年5月28日、姫路獨協大学。
- 2、高山裕二、精神問題は社会現象か (セッションタイトル：ソーシャル・キャピタルと福祉自治)、社会思想史学会、2010年10月23日、神奈川大学。

[図書] (計2件)

- 1、高山裕二、白水社、トクヴィルの憂鬱——フランス・ロマン主義と〈世代〉の誕生、2012年1月、334頁。
- 2、宇野重規・伊達聖伸・高山裕二、白水社、社会統合と宗教的なもの——十九世紀フランスの経験、2011年7月、266頁。

6. 研究組織

- (1) 高山 裕二 (TAKAYAMA YUJI)
早稲田大学・政治経済学術院・助教
研究者番号：90453969

